

がら連行されるその様子はインターネット上で世界に配信された。ウエストはアメリカ黒人研究や宗教研究に従事する研究者である。宗教研究者による、こうした一連の動きに対する応答を現在の日本で想像することが出来るだろうか。このことは何も宗教学に限ったことではないだろう。安丸が序章において指摘するように「わたしたちの学知は、いまのところ、そうした大問題を回避することで営まれている」のである。

本書に収められた各論文は、それぞれがきわめてウエルメイド(上質)である。これは一〇年間の研究会活動において十分に議論が重ねられ、また執筆者たち各々の、文体を含めた役割が成功した稀有な例であるともいえるだろう。これだけの分量をもち、これほどの射程を一冊に扱った書は近年稀であると思われる、それが評者も属する宗教学の業績として提示されたことは大きな喜びである。また「あとがき」では執筆者の一人によって本書の問題点や不十分さが的確に指摘され、かつ展望が示されてもいる。それは学的に真摯な態度であるとともに、後続の研究者である読者にとっては挑発的である。こうした滋味に富んだ果実は若い研究者たちによって広く読まれるべきであろう。ただ、本書まえがきには「戦後知の先人の背中を追いながらも、次の世代にタスキを渡そうとしている」とあるが、これは些か都合のよい語りであろう。後続者たちが十分な脚力をつけるまで、執筆者たちには、どうかまだまだ先導を走り続け、走り抜いていただきたい。そう念願するのは評者ひとりではないであろう。

櫻井義秀編著

『カルトとスピリチュアリティ』

——現代日本における

「救い」と「癒し」のゆくえ——

叢書 現代社会のフロンティア13

ミネルヴァ書房 二〇〇九年一月三〇日刊

四六判 ㄨㄨ. + 二九四 + 五頁 三五〇〇円 + 税

深澤 英隆

本論集は、社会学の叢書という枠内で、カルトとスピリチュアリティ両現象が提起する諸問題をさまざまな角度から論じた、非常に意欲的な論集である。本書の大きな特徴は、方法論や研究関心について極めて自覚的かつ反省的に研究がなされ、論集が編まれている点にある。「はじめに」、「序章」、「あとがき」のいずれにおいても、編者が本書自身に精細な分析と自己検証を加えている。評者としては、それをさらに反省的に論評しなければならぬが、これは必ずしも容易ではない。また研究者の立場性の自覚ということも、本論集が重視する点である。この点で言えば、評者はまずワールドワーカーではない。スピリチュアリティに関わる現場には一定程度足を運んで見聞を重ねているが、カルト現象の現場を实地には知らない。評者としてそうした限界はあるが、以下ではまず本書の構成を掲げ、内容を順次紹介することから始めたい。

はじめに

序 章 カルト問題の比較文化社会学

櫻井義秀

第I部 カルト問題

第1章 人間関係への嗜癖としての回心

——「摂理」と学生・青年信者

櫻井義秀

第2章 過程としての回心——エホバの証人、

福音派からカトリックへ

渡辺 学

第3章 脱会過程の諸相——エホバの証人と

脱会カウンセリング

猪瀬優理

第4章 脱落復帰Ⅱリスタートに向けて

——引きこもりとカルト

渡邊 太

第II部 スピリチュアリティ現象

第5章 宗教研究における「当事者性」と

スピリチュアリティ論

土屋 博

第6章 被害者のクレイムとスピリチュアリティ

小池 靖

第7章 現代日本社会と

スピリチュアリティ・ブーム

櫻井義秀

資料 参考サイト・参考文献案内

中西尋子

あとがき

櫻井義秀

編者の櫻井による序章は、本論集全体の導入部として、カルト問題の「比較文化社会学」的視点とカルト問題調査の方法論について詳しく述べている。本書でのカルトの用語はマスコミに膾炙しているそれではなく、「カリスマ的指導者に率いられた小規模な新宗教という宗教社会学における教団類型論上の用

法である」ことを断った上で著者は、自身の問題意識が、『カルト』を問題化する現代社会の考察」にあるとする。著者は、オウム真理教事件のち日本において、「社会問題としてのカルト問題」が構築されたことを跡づけるとともに、従来の議論では「日本社会が向き合う宗教運動には対処しえない」と指摘する。また内外のカルト問題の議論が噛み合えないという現状から、著者は欧米の研究を輸入するのではなく、「カルト問題と文化や社会規範を含めた社会秩序の比較文化社会学的な考察」が必要であることを指摘する。そこで諸外国および日本のカルト問題と研究者のコミットメントの差異が紹介され、こうした文化間の違いの認識を含め、研究者自身の当事者性の認識の必要性が強調される。その際カルト問題の研究は、その中に研究者も巻き込まれているカルトをめぐる社会的葛藤と社会的構築、さらに「皮肉にも」カルト問題によって形成される公共圏に着目すべきであることが述べられる。加えて、参入調査の困難なカルト研究において、カルト批判の側の資料を用いる著者の立場が紹介されて、あらためて社会問題の構築に参加する自らの立場の自覚と相対化が求められる。またカルト問題は、さまざまなアクターがそれぞれの規範的認識の正当性とそのうえに立つ「正義の実現」をめざす抗争の場であることが指摘され、こうした場を知識社会学的に記述することにより、「社会の重層的構築性」を明らかに出すことを要請する。序章の末尾では、研究テーマ、研究方法、研究者の立場性、社会的実践としての研究、の四つの観点から、本論集の各章の特徴づけがあらかじめなされる、という周到な構えとなっている。

第1章は、教祖の性的スキャンダルで知られるキリスト教系の宗教集団「摂理」を扱っている。著者の櫻井は、この研究そのものが困難な対象に、脱会者や自助グループの世話人等へのインタビューを行うという手法でアプローチする。著者はまず、教団の教義である三十講論を脱会者のノート等から再現することからはじめる。そこから三十講論の特徴として、聖書の比喩的・象徴的解釈、メシアの来臨の摂理とそれを妨害するサタン影響の強調、教祖鄭明析がメシアであることの秘教的根拠づけ、などの点が浮かび上がってくる。その上で著者は、摂理の教化・布教形態をも克明に再現してゆく。こうした分析に基づき、著者は摂理に対し批判的介入をすべきかを問い、それに「あえて介入すべき」であると答えた上で、その理由を四点にわたって述べる。そこでは、反社会性や人権侵害とともに、「宗教文化の品位を損ねる」ことが理由として挙げられる。また摂理脱会の難しさにふれて、カルトの信者が信者相互の人間関係にある種の「嗜癖」をもち、共依存状態を作り出すため、教義を批判しても、信者の脱会にはつながりにくいことが指摘される。論の末尾では、大学内のカルト対策について具体的な提言が述べられる。本章は、おそらく摂理を正面から取り上げた初めての学術的論考であり、研究上でも社会的にも、非常に意義深いものと言える。なお、本章は文字通りカルトを問題視する立場に立つが、これと序章で強調された構築主義の視点との落差を埋める記述が欲しかった。

第2章は、エホバの証人および福音派の信者のカトリックへの回心をとりあげ、宗教的所属の変化という意味での回心の過

程とその背後にある「心境の変化」を論じたものである。著者の渡辺学は、それぞれ特徴的な三人の事例を詳しく論じる。まず三者のカトリック回心以前の回心の経緯が辿られる。最初の事例は、宗教真光、エホバの証人、プロテスタントと回心を重ねて来た事例である。この事例は、強制脱会によって高揚感とともに家族に戻った信者が、なお家族間の葛藤をかかえつつ更に回心を重ねるという例であり、単純な図式に回収しがたい回心過程の複雑さを示している。第二の事例は、やはりエホバの証人から韓国系福音教会を経てカトリックに回心した例である。この事例は、家族の強い反対も無く自覚的に入信しながら、過度の伝道により燃え尽きた状態となり、自然脱会を遂げるというケースがあることを示している。第三の事例は、成人後に福音派プロテスタント教会に自覚的に入信し、神の臨在をも感じながら、所属教会の共同体としての属性の欠如から教会を離れた例である。著者は次に、三者の聞き取りから、それぞれのカトリック信仰への回心のプロセスを詳しく跡づける。三者は三様の経緯をたどるが、いずれも「原理主義的な信仰形態から開放的な信仰形態への移行」として理解できるものとされている。通常の入信論や回心論では扱われにくい、一宗教から他の宗教への回心を詳細な聞き取り調査をもとに行なったという意味で、本章の意義は大きい。一方で、本章ではカトリック信仰に関し手放しの肯定的な言及があるが、著者のカトリック信仰ということを考えると、この点で多少の留保が望ましかったかもしれない。

第3章では、エホバの証人からの脱会の諸事例を通して、脱

会過程がもつ諸相を論じている。著者の猪瀬は、宗教集団をカルトと名づけ批判することが不寛容にもつながるなど一定の留保を示しつつ、エホバの証人をカルト集団ととらえ、論じる。

その際、その中心概念となるのが、「コスト」と「ベネフィット」の釣り合いという考え方である。すなわちある教団を「絶対的に悪い」とは言えないが、「一般社会とのズレは確実にコストとなる」ことに鑑み、コストがベネフィットに比べて極端に大きい「カルト」のもつ「リスク」に注意を促すことは意味がある、という観点である。著者はカルト脱会の一般的特徴を提示してのち、四〇人近いインフォーマントへのインタビューを通じて、脱会のきっかけ、脱会前後に生じる困難、そうした困難を解消する手段、家族の介入の理由などの観点から、脱会過程の諸相とその多様性を類型化している。こうしたうえで著者は、カルト一般における脱会前および脱会時の社会経済的・心理的コストの大きさの特徴づけている。本章は、カルトからの脱会というプロセスが思いのほか多面的な性格をもっていることを示した点で貴重である。さらに、コスト―ベネフィットという観点は、直截な批判とは異なり、研究者に分析的距離を確保させ、また当事者に自省を促す有効な概念であろう。それとともにしかし、信仰当事者自身がコストとベネフィットをどのように考えるかは、別問題として浮上してくるだろう。

第4章は、カルトからの離脱と人生の再スタートの問題を論じている。著者の渡邊太は、脱会の現場において、カルトと救活動側が相互に人権を主張して対立する問題状況を指摘し、また「自力救済」という法的概念の妥当性とその困難を検討す

る。ここで問題状況の再考のために参照されるのが、「引きこもり」とそれに対する介入の事例である。著者によれば、引きこもりには、そうした現状の承認欲求と、そこからの脱出を願う生存欲求が並存している。こうしたジレンマは、マイノリティの諸状況全般に見られるとする著者は、同様のジレンマをカルト信者にも見る。そこではまた、「降りる権利」と「参加する権利」が相克する。著者によれば、引きこもりとカルトの共通点は、小さなきっかけでそこに入り込むと抜け出しがたい点であり、これをふまえて「何度脱落しても自由に再復帰できる社会」の必要性とその困難が、労働条件および第三の社会的場所の必要性という観点から検討される。結論部で著者は、引きこもりの状況をいったん肯定しつつそこから脱却を模索するという態度はカルトにも示唆的であり、カルト内部にとどまつた上で自由の拡張を求めるという選択とそれをサポートする条件作りをも検討している。さまざまな権利と自由のあり方にひろく目配りをし、「参入と離脱に開かれた社会」を模索する著者の議論は、一面的なカルトへの介入論に再考を促す重要な提言を提示している。もちろん引きこもりとカルトとの類比は、形式的・限定的なものたらざるをえず、カルト現象の内実の固有性の検討が更になされねばならないだろう。

第5章は、宗教研究において「当事者性」ということがもつ意味を探り、そのスピリチュアリティ論との関連を論じている。著者の土屋はまず、当事者性という語が弱者の発言権との関係で登場したことをあとづけ、さらに「当事者主権」の考え方が――研究対象の当事者性と研究者の当事者性の二重の意味

で——近代宗教学の主客分離に再考を強いることを確認する。そのうえで、スピリチュアリティ概念の勃興の由来を探り、この概念が「宗教概念を補完する周辺概念」となる場合には、「組織的・制度的教団のはざまに身を置く立場」の当事者性を承認することにつながると論じる。続いて著者は、スピリチュアリティ概念とキリスト教の伝統との関連を探り、現代のスピリチュアリティ概念は直接キリスト教に由来するのではなく、むしろ逆に現代のキリスト教のスピリチュアリティ論が、スピリチュアリティ論や聖霊運動などの興隆を受けて成立したとする。著者は、現代キリスト教神学におけるスピリチュアリティ的契機を見届け、スピリチュアルな要素が、伝統的キリスト教会を活性化もすれば、そのアイデンティティを揺り動かす要因にもなることを指摘する。最後に著者は、スピリチュアリティ概念の両義的性格をあらためて論じ、同時にこの概念が文化現象を読み解く作業仮説的概念として有効であることを確認する。本章の重要性は、当事者性概念とスピリチュアリティ概念との内的関連を明らかにしたこと、またこれによって両概念がもつ複雑な含意を指摘した点にある。著者はキリスト教神学のこの事例は他の宗教集団にも有効性をもつとしているが、この点は言うまでもなく更なる議論を必要としよう。

第6章は、現代社会に広がる「被害クレーム」とスピリチュアリティとの関係という、これまで論じられることの無かった問題に光を当てる。著者の小池によれば、現代社会は心理主義的・セラピー的発想にあふれているが、そうした背景には「自己の聖化」とも言うべき事態がある。一方現代社会を特徴づけ

るもうひとつの現象として、自らを何らかの外部要因の被害者と見なす「被害者化」が進んでいることが指摘される。この「被害者クレームの時代」ともいうべき様相は、著者によれば九〇年代以降の、「弱い自己」を強調するとともに、被害を受ける前の、責任を免れたよりよい神聖な自己の観念を強調する流れとも結びつき、「新しい被害者」像を生み出している。こうした考え方は、著者によれば脱カルトの運動にも見いだされ、さらに苦難の経験の果てに「聖なる自己」を回復するというモチーフにおいて、スピリチュアリティの考え方も深く結びついている。著者はまた、こうした動向が顕著に見られるアメリカと日本との差異にも論及し、日本社会にまだ残存する家族共同体の強さが、こうした「自己宗教」としてのスピリチュアリティの浸透を抑制している面もあるとする。いずれにせよ、著者の結論によれば、「スピリチュアリティとは、セラピー的な瞬間に再発見される自己の、高められた真正さの表現」であることになる。本章は、現代社会に広がる自己感覚の変容という文脈にスピリチュアリティを位置づけることによって、後者がなぜ文化的流行となるかについての有力な説明を与えている。それと同時に、エンゲイジド・スピリチュアリティの潮流等、スピリチュアリティの多様性や多面性をも考慮しつつさらに論議を重ねてゆく必要がある。

第7章は、現代日本のスピリチュアリティ・ブームを、社会的観点から批判的に論じた論考である。著者の櫻井は、まず医療、教育、大衆文化におけるスピリチュアルものの流行を概観し、高度消費社会における自己探求の危うさを指摘する。

さらに著者は、現代のスピリチュアリティ研究の動向を検討し、スピリチュアリティ現象にはなお多くの問いが残されていること、とりわけ社会階層によるスピリチュアルなものとの関わりとの差異にこれまで考察が及んでいないことを指摘する。これを受けて著者は、中流文化の水準低下を意味する「下流化」や、メインカルチャーのサブカルチャー化との関連で、占いやスピリチュアルなものへの関心の特徴づけ、そうした傾向が九〇年代後半以降に出現したことを確認するとともに、市場経済や社会格差による個人への圧力が、社会システムから注意をそらすセラピー社会のなかでスピリチュアリティ・ブームを生み出したのではないかと指摘する。さらに著者は、スピリチュアルなもの見本市である、いわゆる「すびこん」を詳しく紹介し、とりわけ医療やカウンセリング等の領域に素人が参入することを憂慮し、自分探しを続けて下層社会予備軍となる階層とすびこんの顧客や出店者との相関に言及する。最後に著者は、中間的な社会的関係を結ぶことなく直接に世界や地球環境に関わろうとするスピリチュアリティの特徴を、「中抜き思考」と呼び、宗教研究がこうした流行現象に批判的に対峙する必要があることを強調する。価値中立論や、場合によっては研究者自身のスピリチュアリティへの傾斜からして、スピリチュアリティへの批判的視座はしばしば滞りがちである。この点で社会考察に基づく著者の切り込みは、貴重である。一方、本章では著者の強い苛立ちが、少々過度にストレートな否定的価値判断と苛烈なことばとに結びついているさらいがないでも無い。

個々の論考については、すでにふれた通りであるので、本書の意義をより大きなコンテキストで考えてみたい。

社会学の創成期、ということと同時に初期宗教社会学の時代であるが、この時期には、同時代の新たな宗教形成が研究対象となることはなかった。さすがにトレルチはすでに同時代の文化批判的知識人宗教に論及してはいるものの、キリスト教の優越性は譲らなかつた。ヴェーバーやジンメル の時代診断的なテクストにおいてもわずかながら言及があるが、これも研究対象とするまでもなく否定的な判断を下すべきことをほぼ自明視している。こうした傾向は、第二次大戦後かなり時間が経って、ようやく同時代の宗教形成の実証的研究の必要性が意識されるまで続く。そこでなされた実証研究の対象とスタイルはさまざまであつたが、本書との対比で重要な転機は、いわゆる内在的理解や共感的理解の立場の登場であろう。意味了解的パラダイムの隆盛の影響もきっかけであつたが、存在判断のカッコ入れと、近代主義的世界像への文化批判的対抗や、新宗教に対する社会一般の否定的態度への社会学的留保の心性が、こうした理解の立場を支えていた。この一方で、カルトと呼ばれる現象が次第に問題化し、また九五年のオウム事件によって、もはや内在的・共感的理解は不十分、のみならず不適切であると見なされるようになった。しかしその先に、宗教社会学の長い模索の時期が続いた。本書は、こうした模索の最前線で成立したものである。

本書の主たる主張は、まず人権侵犯的な宗教団体にはカルトの呼称を用い、また脱会者やその援助者の証言を研究資料とし

て用いる必要があること、スピリチュアリティとカルトという一見すると相反するかに見える現象は、いずれも研究者の当事者性を巻き込み、現象の側の当事者の立場との対峙を迫る現象であること、その場合研究者としては、これらの現象の社会的被規定性に注目しつつ批判的検討を加えてゆくべきであること、などの点にある。

第一の点について言えば、まずは本書がこれまで宗教研究が忌避してきたカルト的性格をもつ対象に果敢に取り組んでいることは、極めて重要であり、また社会的要請にも応えたものと言える。これまでの宗教研究は、往々にして宗教研究に仮託してメタレベルで自らの宗教的欲求を実現しようとの欲望のゆえに、否定的に論ずる他ない対象を扱いかねてきたのである。しかし一つ疑問点を述べるとすれば、すでに述べたように、序章では社会問題としてのカルト問題への社会構築主義的アプローチが強調されながら、以降の章の多くはカルトを文字通り問題的なものとして自ら構築する立場の研究となっている。構築への直接的参加と構築主義的な問題状況の考察とは、どのように接合されるのだろうか。

第二の点、ことにスピリチュアリティについて言えば、これもこれまでのスピリチュアリティ研究が、その度合いはさまざまであるものの、スピリチュアリティに肯定的にコミットする傾きが目立ったのに対し、批判的な視点が強調されたことは、重要な補正作用をもつものと言える。一見したところ底の浅い思想や実践の中におおむね肯定的に何らかのポテンシャルを読み込むという立場だけでは、消費主義的スピリチュアリティのも

つあやうさや危険性は確かに見えてこないものである。その一方で、カルトやスピリチュアリティについて本書で展開された社会論的説明がより説得力を持ったためには、階層等の社会因子とカルト／スピリチュアリティとの関係をめぐる実証的研究をさらに積み重ねてゆく必要があるだろう。

最後に真理判断／価値判断の問題にふれておきたい。近代宗教(社会)学がいわゆる規範的判断の禁欲を謳ってきたとするならば、当事者性を問題とする研究態度にあつては、さまざまな形で、そうした判断と関わり、またそうした判断を下さねばならない局面が出て来るだろう。本書では、著者により程度の差はあるが、カルトにせよスピリチュアリティにせよ、その当事者の意識が虚偽意識的なものとしてとらえられているように見える。カルト運動の真理請求は、カルト運動の外にいるものにとつては、おそらく意味をなさないだろう。他方で、スピリチュアリティの真理請求や妥当性請求は解体し尽くせると言えるかどうか。意見が分かれるところだろう。この関連で言えば、本書ではカルト現象については、質的調査に基づき論が立てられているが、スピリチュアリティにはそれが無い。ここでもやはり質的調査が必要であろうし、またそうしたなかで真理性や他の妥当性をめぐる信奉者と研究者との当事者間のネゴシエーションが必要となつてこよう。また真理判断や価値判断は、突き詰めればいわば宗教社会哲学とでも言うべきものに接合されつつ、思想的により深められる必要がある。カルトとスピリチュアリティという主題は、実践的介入と社会的分析と思想的深化の三者の媒介を要請するものと言えよう。

以上縷々述べたが、本論集が、所収のシリーズ名の通りに社会学的なカルト／スピリチュアリティ研究のフロンティアを示す里程碑となっていることは確かである。また本書は、（宗教）社会学のみにとどまらず、宗教研究全般に対して、理論的にも実践的にも重要な問題を提起する書物であると言うことができる。

葛西賢太著

『現代瞑想論——変性意識がひらく世界——』

春秋社 二〇一〇年三月二十六日刊

四六判 xii + 二六五 + 六頁 二八〇〇円 + 税

井 上 ウイマラ

本書は、変性意識という視点から意識の主體的体験を考察することを通して、瞑想の心理について考えるためのテキストとして編まれたものである。本書に引用され紹介された文献は瞑想という言葉によって連想される範囲を超えて実に多岐にわたり、各章の最後に設けられたサプリー（コラム）や文献ガイドからも著者の広い学識と瞑想について幅広く知ってもらいたいという熱意と親切心が感じ取れる。

著者は「はしがき」の冒頭で「寺院や修道院で修行する出家者の視点ではなく、世俗のなかで仕事に励む人々の視点に立ち」、「悟りや解脱とは何かという、高度に抽象的な、哲学的あるいは哲学的な議論は行わず」という選択をした。評者は、こうした選択によって瞑想理解に関して取りこぼしてしまうものが少なくないのではないかとという疑問を抱いた。しかし読み終えてみると、悟りや解脱に関する議論は抽象的で哲学的だという著者の言葉に反応してしまったのは、僧院での専門的な瞑想修行体験をもつ評者自身の「伝統的な経典翻訳を含めて、私た